

株式会社 村山金平商店

1841(天保11年)創業

一言と、信頼する心 先代の教えは「手を抜くな」の

「村山金平商店」とインターネット検索をすると、「肥料商」とともに「トヨタカローラ栃木創業者の記述がヒットします。「意志が強く、面白い人物」と、生前を知る誰もが口を揃える6代目村山金平氏から家業である肥料商を継承した7代目社長に、同社のこれまでとこれからを伺いました。

競輪場通り沿いの社屋で、県内全域を商域に肥料卸業を営む(株)村山金平商店。昭和44年頃にこの地に移転する前は、大工町(現在の明治安田生命宇都宮大通りビル近辺)の広い敷地にいくつもの蔵を有していた老舗の肥料商です。

「安政4年に作られた大皿の箱書きに『戸室屋金兵衛』の名が記されているので、初代は大谷の戸室山近辺の出身だったようですが、今となっては昔のこと

はよく分らないんです」と笑顔で迎えてくれたのは、7代目当主の高橋眞理社長。父親である6代目村山金平氏が亡くなった後、会社経営にあたった母の郁さんにならって、平成21年に社長に就任。現在は専務取締役の高橋恭司氏とともに同社の経営にあたっています。

「父は、社史を編纂するに、社訓を作った後世に残すということを目指しとしない人でした。蔵の行季には古い覚え書き帳などがたくさん残っていますが、「と、明治42年から大正元年の記録が綴られた『萬覚簿』」を見せてくれました。筆で書かれた文字を追うと、アブラカスなどの納品した肥料の名称や価格、頼んだ人夫と報酬額などの現金出納が細かく記されており、当時の人々の活気溢れる様子が生きいきと伝わってきます。



この1枚の絵からも、大工町で肥料商として大いに栄えていた様子がうかがえる。

「父は、社史を編纂するに、社訓を作った後世に残すということを目指しとしない人でした。蔵の行季には古い覚え書き帳などがたくさん残っていますが、「と、明治42年から大正元年の記録が綴られた『萬覚簿』」を見せてくれました。筆で書かれた文字を追うと、アブラカスなどの納品した肥料の名称や価格、頼んだ人夫と報酬額などの現金出納が細かく記されており、当時の人々の活気溢れる様子が生きいきと伝わってきます。

鉄道駅に近い大工町に蔵を構え肥料商として発展した同社が大きな転機を迎えたのは、昭和36年。その前年に社長に就任した村山金平氏がトヨタ車を扱うパブリカ栃木株式会社(現・トヨタカローラ栃木株式会社)を

創業し、最先端だった車の販売を始めました。「好き嫌いははっきりとしていましたが、家庭では『あもしろこうしろ』とは言わない人でした。ただ「手を抜かず」にきちつとやれ」とそれだけ」と眞理さんの言葉通り、金平氏は車両販売に全力であり、創業から25年後の昭和61年発行のタウン誌には「世界のカローラを月平均1000台売りさばく猛者」として紹介されています。この時、企業発展の秘訣を尋ねられた金平氏の答えは、「カローラが非常に優秀であったこと、人材に恵まれたこと。さらに「免許は持っているけど車は減多に乗らない」と車に興味はないと断言し、「シンボルロードを車両通行禁止にし



明治42年から大正元年にかけて綴られた「萬覚簿」。

て、市がサイクリングの提案などをどんどんやったほうがいい」と、先進的な発言も。企業人として「何よりも大切なのは人」と、人との繋がりを重要視して地域の発展に尽力しながら、家庭では芸術を愛し、自分らしい趣味の世界を存分に楽しんだ金平氏。その生き方を長女として身近で見てきた眞理さんは、こう言います。「人生は予想外のことばかり。これから先はわかりませんが、ただ、父は人を心底信用してすばらしい人材を育ててくれました。うちは代々、人任せなんです(笑)」

一切の道徳的な言葉を残さなかった金平氏から継いだのは、人という貴重な財産と、人を信じ、託し、任せながら、自分らしく生き抜く強さ。眞理さんの笑顔は、愛される経営者の面影そのもの。かつての金平氏同様、明るく、強く、輝きを放っています。

株式会社
村山金平商店
宇都宮市錦3丁目10-6
☎028-621-0551
☎028-624-4451